THE ROVER SCOUT LEADER HANDBOOK

ローバースカウト隊 リーダー ハンドブック

公益財団法人
ボーイスカウト日本連盟
SCOUT ASSOCIATION OF JAPAN

ローバースカウト隊
リーダーハンドブック

CONTENTS

はじめに

1 スカウト運動がめざすもの ・・・・・・・03

2 ローバースカウト活動とは・・・・・・・・09

3 ローバースカウト活動の進め方 ・・・13

4 個人の成長のための支援 ・・・・・・・・20

はじめに

このハンドブックは、ローバースカウト隊の指導者として、ローバースカウトが自己を確立し、社会貢献や運動への奉仕を積み重ね、「よき社会人」（永続的に社会に貢献できる責任ある市民）として活躍していくために、どのような支援をどのように行うのかをまとめました。

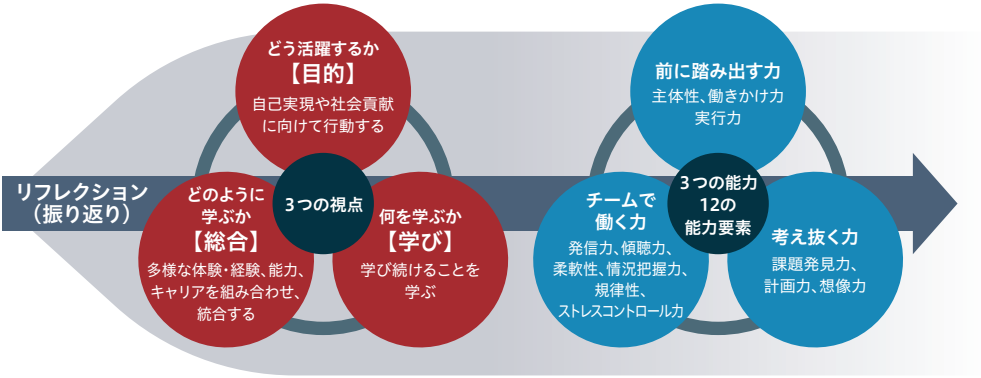
ローバースカウト部門のプログラムも、スカウティングの目的と原理、方法に沿って行われます。

「スカウティングの焦点」とも言える社会への入口に立つ年代のスカウトが、これまでのスカウト活動や人生経験の中で培った知識や心構え、スキルを駆使し、さらに新たに身につけて、地域社会はもとより、さまざまな分野で活躍できるように支援をすることが求められます。

また、ボーイスカウト年代やベンチャースカウト年代からすれば、ローバースカウトとして活動している姿が「憧れの存在」となる必要があります。

経済産業省が、2006 年に「人生 100 年時代の社会人基礎力」を提唱しました。「人生 100 年時代の社会人基礎力」とは、個人の企業・組織・社会との関わりが、これまで以上に長くなる中で、ライフステージの各段階で活躍し続けるために求められる力と定義されています。社会人基礎力の 3 つの能力／ 12 の能力要素を内容としつつ、能力を発揮するにあたって、自己を認識してリフレクション（振り返り）しながら、目的、学び、統合のバランスを図ることが、自らキャリアを切りひらいていくうえで必要と位置付けられています。

どう活躍するか【目的】	●組織や家庭との関係でどんな自分でありたいか
何を学ぶか【学び】	●自らが付加価値を生み出すための学びは何か ●学びの広さや深さを得らえるか
どのように学ぶか【総合】	●多様な人と出会い、視野を広くもち、多様な機会を得ているか



※参照　一般社団法人社会人基礎力協議会

このことを踏まえ、社会への入口に立つスカウトが、各分野で活躍をするために次の社会を形づくる若い世代に対しては、「常識や前提にとらわれず、ゼロからイチを生み出す能力」「夢中を手放さず一つのことを掘り下げていく姿勢」「グローバルな社会課題を解決する意欲」「多様性を受容し他者と協働する能力」といった、根源的な意識・行動面に至る能力や姿勢がより一層求められています。ローバースカウトが「ちかい」と「おきて」の価値観を深め、実践を基に自分で考え、自分で行動し、自らに責任をもつことが社会人基礎力を作る基盤となります。

ローバースカウトは、学生から社会人へ変わる重要な時期に、不安を抱きながら自己探求を重ね成長をします。この重要な時期に豊かな人生経験を持つ、心から話し合え、信頼できる指導者やアドバイザーがいるならば、スカウトたちは自信を持って大変有意義な活動が展開できるでしょう。

スカウト運動の創始者であるベーデン - パウエルの死後に発見された、スカウトに宛てた「ラストメッセージ」には、「幸福を得るほんとうの道は、ほかの人に幸福を分け与えることにある」と書かれています。ローバースカウトが、社会の一員として「幸福な人生」を歩み、より良い社会を築くことができるよう、スカウトへの支援をお願いいたします。

1 スカウト運動がめざすもの

1-❶ スカウト運動の基本原則

スカウト運動は、青少年のための教育運動です。この運動の中心には、運動の基本方針として世界スカウト機構憲章があります。この第1章のなかには、「定義」「目的」「原理」「方法」があり、これらを総称して「基本原則」と呼んでいます。そして、この基本原則をもとに、日本連盟でも「目的」「基本方針」を定めています。

定　義

1. スカウト運動は、創始者によって考案された目的、原理、方法および以下に述べる事項に従って、性別、出生、人種、信条による区別なく誰をも対象とした、青少年のための自発的で非政治的な教育的運動である。

目　的

2. スカウト運動の目的は、青少年が個人として、責任ある市民として、地域、国、国際社会の一員として自らの身体的、知的、情緒的、社会的、精神的可能性を十分に達成できるように青少年の発達に貢献することである。

ベーデン-パウエル（B-P）は、その死後に発見された最後のメッセージの中で、「幸福を得るほんとうの道は、ほかの人に幸福を分け与えることにある。この世の中を、君が受け継いだ時より、少しでもよくするように努力し、あとの人に残すことができたなら、死ぬ時が来ても、とにかく一生を無駄に過ごさず、最善をつくしたのだという満足感をもって、幸福に死ぬことができる。」と述べています。スカウト運動では青少年が社会人・国際人としてよりよい世界を構築することに参加できるように貢献することを目指しています。そのためにも、指導者自身が基本原則を理解することが必要となります。

1-❷ スカウト運動の原理とちかいとおきて

基本原則では、「神へのつとめ」「他へのつとめ」「自分へのつとめ」の3つをスカウト運動の原理としています。この原理を反映し、端的に示したものが「ちかい」と「おきて」です。

原　理

1. スカウト運動は以下の原理に基づいている。

- **神へのつとめ**
  信仰上の原則の堅持、それらを表明する宗教への忠誠、およびそこから生じる義務の受け入れ
- **他へのつとめ**
  — 地域、国、国際間の平和と理解と協力の促進と調和した自国に対する忠誠。
  — 人間であることの尊厳や自然界の完全性を認め、感謝と敬意をもった社会発展への参画。
- **自分へのつとめ**
  — 自分自身の発達に対する責任

スカウトの「ちかい」 教育規程 1-11

①スカウトの「ちかい」は、次のとおりとする

私は名誉にかけて次の三条の実行をちかいます
一、神（仏）と国とに誠を尽くしおきてを守ります
一、いつも他の人々をたすけます
一、からだを強くし心をすこやかに徳を養います

②ボーイスカウトは、入隊に際してスカウトの「ちかい」をたてる。

③ベンチャースカウト及びローバースカウトは、入隊又は上進に際してスカウトの「ちかい」をたてるか、これを再認する。

④はじめて指導者になるときには、スカウトの「ちかい」をたてるか、これを再認する。

⑤前項に定める者のほか、本運動に関与するすべての者は、スカウトの「ちかい」をたてることが望ましい。

スカウトの「おきて」 教育規程 1-14

スカウトの「おきて」は、次のとおりとする。

1　スカウトは誠実である

スカウトは、信頼される人になります。
真心をこめて、自分のつとめを果たし、名誉を保つ努力をします。

2　スカウトは友情にあつい

スカウトは、きょうだいとして仲よく助け合います。
すべての人を友とし、相手の立場や、考え方を尊重し、思いやりのある人になります。

3　スカウトは礼儀正しい

スカウトは、規律正しい生活をし、目上の人を敬います。
言葉づかいや服装に気をつけ、行いを正しくします。

4　スカウトは親切である

スカウトは、すべての人の力になります。
幼いもの、お年寄り、体の不自由な人をいたわり、動植物にもやさしくします。

5　スカウトは快活である

スカウトは、明るく、朗らかに、いつも笑顔でいます。
不平不満を言わず、元気よく、進んでものごとを行います。

6　スカウトは質素である

スカウトは、物や時間を大切にします。
むだをはぶき、ぜいたくをせず、役立つものは活用します。

7　スカウトは勇敢である

スカウトは、勇気をもって、正しく行動します。
どんな困難なことがあってもくじけずに、新しい道をきり開きます。

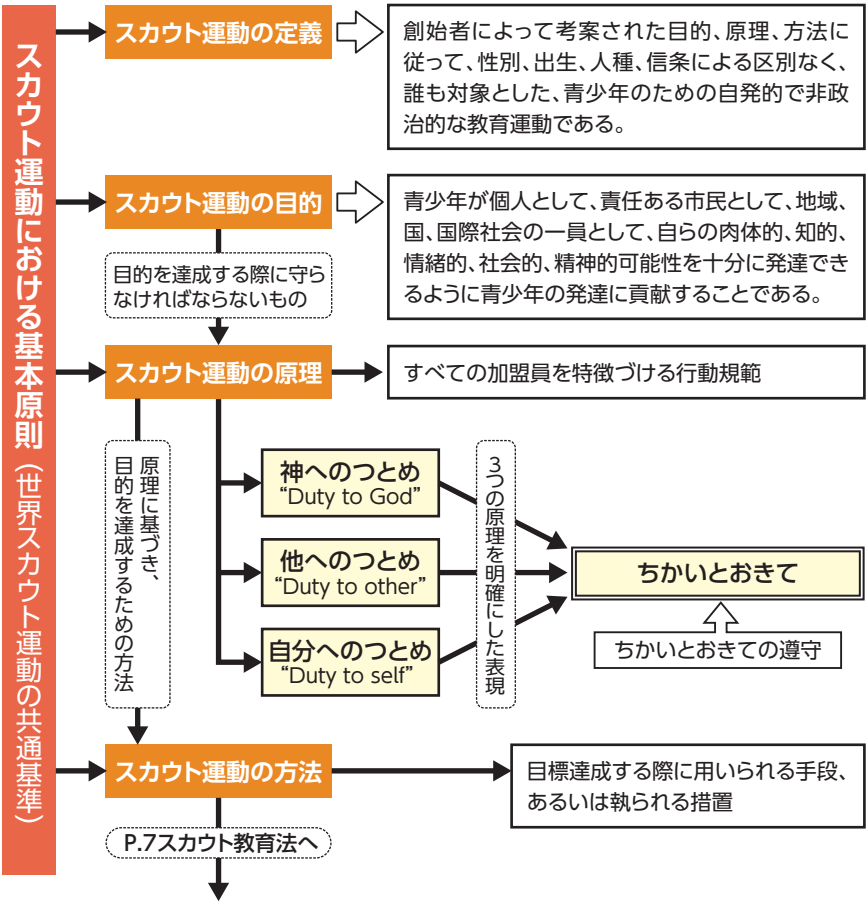
8　スカウトは感謝の心をもつ

スカウトは、信仰をあつくし、自然と社会の恵みに感謝します。
お礼の心で、自然をいつくしみ、社会に奉仕します。

詳細とその指導については『おきて指導の手引き』を参照してください。

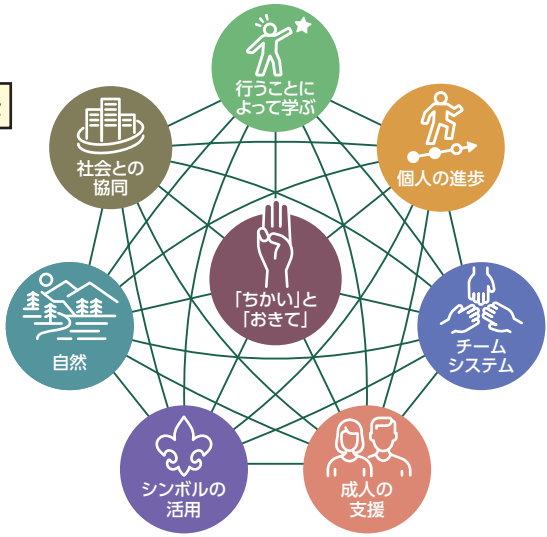
1-❸ スカウト教育法

基本原則の「方法」の部分では、スカウト教育の特徴的な方法として「スカウト教育法」が示されています。これは、目標を達成する際に用いられる手段であり、この方法はスカウト運動の原理に基づいています。スカウト教育法は「ちかいとおきて」「行うことによって学ぶ」「個人の進歩」「チームシステム」「成人の支援」「シンボルの活用」「自然」「社会との協同」の8つの要素で構成されています。2017年8月、アゼルバイジャンで開催された第41回世界スカウト会議にて決議された「スカウト教育法の見直し」により、「社会との協同」が追加され、要素の定義が7つから8つに変更されました。すべての部門において、これらの8つの要素が効果的に織り込まれていることが大切です。



P.6から

スカウト教育法



1-❸ 日本におけるスカウト運動

日本連盟は、世界のスカウト運動と目的をともにし、日本におけるスカウト運動を展開しています。日本においては発達段階に応じて5つの部門に分かれており、それぞれの年代に応じたプログラムを展開しています。

【日本連盟の教育の目的】 教育規程 1-3

本連盟は、ボーイスカウトの組織を通じ、青少年がその自発活動により、自らの健康を築き、社会に奉仕できる能力と人生に役立つ技能を体得し、かつ、誠実、勇気、自信及び国際愛と人道主義を把握し、実践できるよう教育することをもって教育の目的とする。

【日本連盟の基本方針】 教育規程 1-4

ボーイスカウト運動は、「ちかい」と「おきて」の実践を基盤とし、ベーデン-パウエルの提唱する班制教育と、各種の進歩制度と野外活動を、幼年期より青年期にわたる各年齢層に適応するようにビーバースカウト、カブスカウト、ボーイスカウト、ベンチャースカウト及びローバースカウトに区分し、成人指導者の協力によってそれぞれに即し、かつ、一貫したプログラムに基づいて教育することを基本方針とする。

より良き社会人

知識や心構え、スキル

ローバースカウト

年代の課題
成人としての人道主義の実践と社会奉仕

教育のねらい
自己探求奉仕

活 動
自己研鑽と奉仕活動

ベンチャースカウト

年代の課題
社会の中における個人としての成長

教育のねらい
自主活動と自己目標の発見
▶個人の完成

活 動
グループワークとプロジェクト

ボーイスカウト

年代の課題
地域社会における公民性・社会性の涵養

教育のねらい
自発活動の奨励
▶集団における役割

活 動
ゲームとルール

カブスカウト

年代の課題
社会規範の認識と受容

教育のねらい
しつけの指導
▶集団への適応

活 動
あそび

ビーバースカウト

年代の課題
周囲の人間の認識

教育のねらい
集団への参加

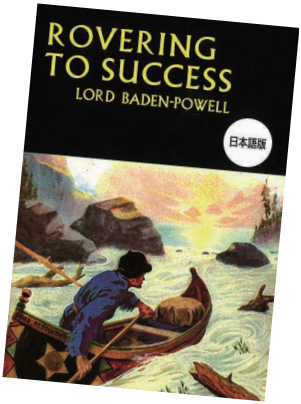
活 動
あそび

2 ローバースカウト活動とは

2-❶ 『ローバーリング・ツウ・サクセス』

B-Pは、1922年に『ローバーリング・ツウ・サクセス』を出版しました。これはスカウト運動に参加している青年に、青年としての生き方や将来進むべき方向を示す本となっています。この序論には「貧富を問わず幸福になるとは」という題がつけられ、成功とは金儲けや権力を得ることではなく幸福を得ることだと説いています。

B-Pは青年たちに対して、実社会で起こるさまざまな困難を「大海原」に例え、その中を自分の力だけで乗りきっていく雄々しい姿を「自分のカヌーは自分で漕げ」と励ましました。ローバーリングを通じた積極性や自制と品性などの醸成が暗礁に乗り上げることなく、幸福を得る訓練となると述べています。社会情勢などの部分は時代とともに変わっていきますが、暗礁に乗り上げることなく積極的に自分の人生を獲得していくローバースカウトの育成を目指すという部分は不変です。指導者はB-Pの意図を汲み取り、「青年が人生の幸せを得る」ためにスカウトへの支援を行う必要があります。



2-❷ ローバースカウト年代の特性

ローバースカウト部門は、18歳から25歳の青年期から成人前期と呼ばれる年代へ移行する時期の青年で構成されています。この年代は子どもから大人になる最終段階です。身体の成長がほぼ完成する一方、心の成熟が問題となってきます。

心理学者エリクソンは子どもと大人の境目において、「能力がまだ十分に発揮していない青年が、大人の領域に踏み込めずに社会に対して一定の距離を置いている状況」を一定期間の猶予を表す金融用語を用いて「モラトリアム」と定義しました。この期間は自由な精神で自分と向き合い自分の居場所を探すことで、アイデンティティを獲得し、社会的責任を担う準備をする期間です。

モラトリアムには次の5つの特徴があるとされます。

特徴❶ 回避

将来どのような仕事に就くか、どのような家庭を築きたいかなどあらゆる人生設計から目をそらした状態となります。

特徴❷ 拡散

将来を考えてはいても、あれこれ目移りしてしまい方向性が定まらず、心理的に不安定な状態になりやすくなります。興味の対象がコロコロ変わるのも特徴です。

特徴❸ 安易

自分の頭で考えずに、人の意見に引っ張られがちな状況です。誘われるままに受動的な選択をしてしまいます。

特徴❹ 延期

選択を先延ばしします。わざと留年する、とりあえずフリーターになってやりたいことを探す、などが挙げられます。

特徴❺ 模索

自主的に選択に取り組み、社会的な責任を果たす努力をし、モラトリアムから脱却しようとしている状態です。

この年代に接する指導者には、多様性を認めモラトリアムの特徴である不確実さや選択を先延ばしする状況を理解し、青年の模索を支える寛容さが必要となります。それは、青年の未熟さをそのまま見過ごすべきであるということではなく、将来成熟する力への期待をもとに、青年を支える環境が重要であるということです。この青年を支える環境のなかで、自分たちで意思決定し活動を進めていくことは、一方的に与えられるものよりも大きな意味をもたらすことになります。そのため、指導者は傾聴などを通じて心理的安全性を確保し、挑戦の後押しをすることが求められます。

2-❸ ローバースカウト教育の目的・目標

ローバースカウト部門の教育は、モラトリアムからの脱却を模索し、社会的責任を果たそうとするこの年代の成長を支援するものとなっています。また、社会的責任を果たすうえで必要な資質―人格・健康・技能・奉仕―を養うため、この年代の身体的・精神的・社会的特徴を考慮した目標が定められています。この目標は「スカウト教育法」に示された8つの要素をベースに設定しています。これにより、目標達成度を効果的に示すことが可能となります。ここで示すローバースカウト活動の目標は「活動の目標」であり、「指導上の目標」ではありません。ローバースカウト自らが、活動を実施するための目標となるものです。

【ローバースカウトの教育】 教育規程 7-30

ローバースカウトの教育は、「ちかい」と「おきて」の実践によって自らの有為の生涯を築き、各人がそれぞれの社会的環境において、永続的に地域社会・国際社会に貢献できる責任ある市民となる青年を育成することを目指すものとする。

【ローバースカウト活動の目標】 教育規程 7-31

ローバースカウト活動の目標は、次のとおりとする。

- 明確な信仰をもち、自己の所属する教宗派の行事に進んで参加する。
- 高度の野外活動により、心身を鍛錬しスカウト技能を磨き奉仕能力を向上させる。
- 自ら課題を設定し、調査、実験及び実習によってこれを研究し、自己の生活を更に開発する。
- ビーバー隊、カブ隊、ボーイ隊又はベンチャー隊の訓練指導に協力し、奉仕する。
- 地域社会への認識を深め、地域に貢献する。
- 国際組織、国際社会の一員として、相互理解を深め、国際活動、国際協力について学び実践する。

昨今、日本の青年を取り巻く社会経済環境は大きく変化を遂げています。具体的には次のような項目が挙げられます。

これにより、社会が青年に求める内容も変化をしています。ローバースカウトの支援にあたっては、現代の社会情勢やスカウトの置かれている環境を理解し、スカウトが積極的に自分の人生を歩むことに資する活動となるよう助言をすることが求められています。

また、スカウトが社会に出た後も変化に対応し、永続的に社会に貢献できる人材となるよう、活動を通じて社会の状況に関心をもち、自ら考え判断することに対する支援も必要です。人生100年時代と呼ばれるうえに変化が速い今の時代、一度身につけた知識やスキルだけで生きていくのは難しい時代になっています。生涯にわたる学習と探索が求められており、リスキリングやリカレント教育という言葉も一般的になっています。指導者は、現在の社会に貢献できる固有のスキルを身につけさせることではなく、スカウト自身の経験や強みと学びを融合させ価値を生み出していくことができるよう成長させることを念頭に置く必要があります。

3 ローバースカウト活動の進め方

3-❶ ローバースカウト活動とは

ローバースカウト隊の活動は、年代に相応しい知性と体力、かつ精神的な面でも幅広い活動によって、ローバースカウト自らが人間的な成長を図り、持っている力を奉仕活動や公共のために尽くすことが目標です。ベンチャースカウト部門までは個々のニーズに基づく活動が原動力となっていましたが、ローバースカウトは奉仕活動や地域・国際への貢献活動、自己鍛錬をニーズではなく「ミッション（社会に果たすべき自らの使命）」として活動を展開します。スカウト同士が活動に向けて話し合い、指導者やアドバイザーから支援を得て、有意義な活動の展開を立案・実行して行くことになります。自分たちの手で個人として、またはグループとしての成長や地域への貢献はいかにあるべきかを研究しながら、プログラムを作り上げることができるようにしましょう。

教育規程7-32にはローバースカウト活動の実施について定められています。

【ローバースカウト活動の実施】 教育規程 7-32

①ローバースカウト隊の活動は、隊で定めた自治規則に則り、活動の目標を定めて運営される。
②活動は、個人・隊・活動チームによる自己研鑽と、奉仕活動その他の社会活動によって行われる。
③隊指導者は活動形態や内容に応じて、指導や助言にふさわしい資質と経験を備えた者をアドバイザーとして連携して指導を行うことができる。
④活動は活動形態に従い、隊長の承認を得る。

ベンチャースカウト部門までは、活動形態（班長会議や隊運営会議、班長や運営スタッフなど）が定められ、その中で年代の特性に合わせた自治が行われるのに対し、ローバースカウト部門では、隊で自治規則を定め、運営方法も自身で決定するという特徴があります。より一層の高度な自治を行い意思決定に深く参画することは、責任ある市民の育成という観点でもスカウトの成長に大きく寄与するものです。また、この教育効果は隊の自治だけでなく他の組織への参画でも同様で、参画を推進することが青年の意思決定参画の方針として定められています。

自治規則の制定にあたっては、ルールを作ること自体が目的ではなく、自分たちの手で運営していくことが重要です。指導者は社会環境や考え方の変化に対応し、社会通念に照らし合わせ、自治規則の定期的な見直しを助言する必要があります。

●スカウト・青年の参画方針について

世界スカウト機構(World Organization of the Scout Movement、略称:WOSM)では1993年以降、青少年の参画を強化する方向が打ち出され、2014年の世界スカウト会議において「世界スカウト青少年参画方針」(以下、「世界参画方針」という。)を採択しました。この世界参画方針は、スカウト自らの活動および地域社会等に対する意見・提言を行うことで、「社会において責任を負うことを通じ、適切な技能と知識の習得を可能とする。」としています。これを踏まえ、日本連盟では、スカウトおよび青年の参画方針は「教育プログラム参画の方針」と「青年の意思決定参画の方針」の2つに分かれています。

●青年の意思決定参画の方針

一般的に青年は、自立した社会人としてのアイデンティティ(自我同一性)の確立が未成熟な面もあると言われています。社会との主体的な参加や関わりを通じて多様な活動や多岐にわたる知識、さらには他者の価値観・意見等に触れ、自分自身のことを振り返ることで自己の確立が築かれることが期待されています。青年の意思決定への参画は、個人の成長を助長する経験として有効であるとともに、日本連盟内組織の充実・活性化に大きく貢献することを認識し、各組織の意思決定機関に青年の参画を積極的に取り組むことを推奨します。

【青年の意思決定参画の方針】 スカウト・青年の参画方針 Ⅳ-2

- 青年の意思決定へのプロセスの重要性を認識し、青年個人の成長を促す。
- 青年参画の領域は、スカウト運動の組織面、教育面にとどまらず、広く社会全体や地域社会の 貢献を視野に入れる。
- 日本連盟の組織運営面、スカウト教育面に関して青年の意思決定の参画機会をつくる。
- 日本連盟内組織の意思決定機関への青年の活用を推進するものとする。
- 青年の人選にあたっては、必要とされる能力や資質、年齢制限等の要件を明確にし、また公平に行うものとする。

ローバースカウト部門の活動の種類は、自己研鑽と奉仕活動やその他の社会活動と定義されています。自己研鑽には後述するセルフエグザミネーションのような形態だけでなく、自然や異文化の探検といった活動も含まれます。奉仕活動やその他の社会活動は、スカウト活動への奉仕だけでなく、他団体や地域社会を巻き込み活動をしていくことも含まれます。これらの活動は独立ではなく、自己研鑽の結果が奉仕活動やその他の社会活動につながり、奉仕活動やその他の社会活動の中での経験に基づく気づきが自己研鑽へとつながっていきます。

●ベンチャースカウト部門との違い

ベンチャースカウト部門の教育では、自ら考え行動し、その結果に責任を負うことができることを教育の目的としています。ベンチャースカウト部門のプロジェクトは、プロジェクト法の習得に主眼が置かれているため、結果が思うようにならなかった際にも、その評価を行うことでプロジェクト法の一連の流れが完成します。一方で、ローバースカウト部門では、社会に貢献できる人材の育成という側面が重視されているため、活動の目的として定めた事項が達成できているかを重視します。

参考：教育規程 7-26 **【ベンチャースカウトの教育】**

ベンチャースカウトの教育は、スカウトが隊や活動チームに参加し、「ちかい」と「おきて」の実践及びグループワークの手法を用いたプログラム活動を通して自ら考え行動し、その結果に責任を負うことができるように育てることを目指すものとする。

3-❷ 活動の承認

ローバースカウト部門の活動は、隊長の承認を得て行います。指導者として活動を承認する際には次の項目を確認し、必要に応じてスカウトへ助言します。

●活動内容とスカウトが得られるもの

活動内容が自己研鑽、奉仕活動その他の社会活動につながっているかを確認します。特に活動経験の浅いローバースカウトの場合、興味関心や前例のみに基づく活動になりがちです。その企画に対して指導者は、活動がスカウトの視野の拡大につながるよう助言をすることが必要です。スカウトの興味関心を取り入れつつ、その先のスカウトの成長と社会貢献を見据えて柔軟な発想を提供します。また、ローバースカウト年代を通じた活動でのバランスについても考慮します。活動することが目的ではなく、活動を通じて普段の考え方や取り組み方にどのような変化を及ぼすことができるのかを考慮し承認します。

●安全

安全はすべてに優先します。指導者の目線で安全対策がなされているかを確認し、不十分な点があれば改善方法について助言します。最終的にはローバースカウト自身で安全を考慮したプログラムが作成できることを目指し、助言の際にはスカウトの安全に関する能力が向上するよう意識します。

●目標設定と実現可能性

スカウトの能力や実施時の状況に対して目標設定が適切か、実現可能な計画となっているかを確認します。必要に応じて知識やスキル面の支援体制も検討します。

●手続きの実施

活動を実施するうえで必要な手続き（県外旅行申請書、国際紹介状など）が行われているかを確認します。ローバースカウト年代では、手続きが後回しになることも多いため、期限内に必要な手続きが行われるよう助言します。また、ボーイスカウト以外の団体等と連携した活動の場合は、相手のルール等に則っているかなど、社会経験を元に助言します。

ローバースカウト部門における安全

安全教育

- 安全教育に関する「指導力」
  自ら安全に行動し、他の人や社会の安全に貢献できる資質・能力を育成する。

安全管理

- 事故を未然に防ぐための「管理力」
- 事件・事故発生時の的確な判断力・行動力 危険等から自らおよび仲間の安全を守るための安全管理を行うとともに、事件・事故発生時には迅速で適切な対応を行う（人的管理、物的管理）。

安全意識の向上

活動を安全に実施するためには、活動に関わるすべての人が、常に高い安全意識をもつ必要があります。リスクマネジメントの考え方など、スカウトが「常識」として平素から意識できるよう働き掛けることが大事です。また、活動前には安全の視点から点検する機会をもち、全員が話し合い、意識を高める工夫も必要です。計画ができたとしても健康や安全に対する配慮に少しでも不十分な点があれば、もう一度出発点に立ち戻り、安全対策を第一に考えることができるよう助言しましょう。

安全に関する能力の向上

安全意識を基盤として、そのうえで必要な知識や技能を身につけるために、隊としてはさまざまな機会において安全対策として技能訓練を実施する必要があります。同時に、自己研鑽や経験を積むことにより知識や技能を各自で修得するなど、個人としての能力向上の努力も必要です。これら両方が補完し合い、相乗的な効果を上げていくことが大切です。救急法などの各種講習も自発的かつ定期的に行いましょう。

危機管理の訓練

安全対策では対応できない危機管理（活動中の地震や落雷、水害など）に備えて、定期的に訓練を行うなど、安全の確保は隊長にとってもスカウトにとっても第一に取り組むべき事項となります。活動中におけるマイ・タイムライン（個人防災行動計画）作成も、安全に対する意識を高める一つの方法です。

3-❸ 「ちかい」の再認とセルフエグザミネーションの支援

セルフエグザミネーション(Self-Examination)とは、自己を見つめ今後の生き方について考え自問することです。セルフエグザミネーションという言葉はキリスト教でも使われ、自分の行動が教義と一致しているかを確認することを目的として、自分自身の行動、動機、気分、信念、状態などを調べる行為を指します。

スカウト運動において「ちかい」と「おきて」は、スカウト運動が掲げる理想へとつながる共通の信条と行動規範です。スカウト活動に留まらず日常生活においても「ちかい」と「おきて」をもとに、良き社会人(永続的に社会に貢献できる責任ある市民)としてどのような生き方をしていくのかを考える機会がセルフエグザミネーションです。言い換えれば、スカウト運動が掲げる理念である「よりよい世の中を作ること」にどのように貢献するのか、自分のカヌーをどこに向かって漕ぐのかを考え、漕ぎだしていく行為に当たります。

教育規程では、「ベンチャースカウト及びローバースカウトは、入隊又は上進に際してスカウトの「ちかい」をたてるか、これを再認する。」と定めています。ボーイスカウトまたはベンチャースカウト経験のあるスカウトは、「ちかい」の再認にあたり、今までの「ちかい」と「おきて」の実践について振り返り考える場として、セルフエグザミネーションを実施します。経験のないスカウトにおいては「ちかい」を初めてたてることになりますが、スカウト自身が今後の人生をどのように歩んでいくか考える場として、セルフエグザミネーションの方法を活用することができます。今までの活動を通して構築されたスカウトとしての精神的な構造を自ら理解し、「ミッション」として取り組むべきことにどう取り組むのか?　成人域に達した青年が、ボーイスカウトをバックボーンとしてこれからどう生きて行くのか?　スカウティングの目指す国際平和への道として国内の平和に向けた活動、そのために自分の周りや家族、仲間等周囲に対して何ができるのか?　等をこの機会にしっかり考えさせることが大切です。

また、セルフエグザミネーションは一度限りのものではなく、適宜実施していくことが大切です。第2章で述べたように、ローバースカウト年代はアイデンティティを獲得し社会的責任を果たす準備をする時期です。置かれている環境も8年間で大きく変化します。8年間の間に繰り返し実施することで、セルフエグザミネーションを通じた振り返りの質や今後の生き方の具体性も成長していくはずです。

セルフエグザミネーションには多くの方法が考えられますが、典型的な4つのステップを次に示します。ステップを通じて考え気づきを得ることが目的であり、ステップをこなすことが目的ではない点に注意が必要です。場所や環境にとらわれるのではなく、スカウトが自分自身と対話する場であることが求められます。スカウト同士や指導者との対話をもとに考えるという方法もあります。

**セルフエグザミネーションには多くのやり方がありますが、
下記の4つのステップを例として示します。**

step 1 「ちかい」と「おきて」を再確認する

ローバースカウトとして、一人の成人として、「ちかい」と「おきて」に触れる。
これまでできていた行動はなんだろうか。できていなかった行動はなんだろうか。

step 2 自分の経験や体験を振り返る

自分の過去の経験や体験は轍となり現在そして未来の自分へとつながっていく。
単に「こんな経験をしてきた」という表面的な振り返りにとどまらず、
今まで自分がどのような意識でボーイスカウトに取り組んできたか?
その経験や体験が「現在の自分にとってどんな意味があるか」、
「未来の自分にとってどんな意味をもつのか」という点まで踏み込もう。

step 3 集中できる場所で静かに考えてみよう

自分はどのようにちかいとおきてに向き合っていくのだろうか。
自分はどのような道を歩んでいくのだろうか。
どのように社会に貢献していくのだろうか。
自分が目指す姿になるために今後なにをしていけばよいのだろうか。

step 4 決意表明をしよう

自分との対話の中で考えたことを言葉にしましょう。
無理に答えを見つけ出す必要はありません。
「何が足りていなかった」、「今の自分はこうだ」という気づきだけでも大丈夫です。

セルフエグザミネーションは、スカウトによって感じる内容や気づきが異なり、特定の正解があるわけではありません。指導の際にはスカウト一人ひとりに寄り添いながら、スカウトが大海原へ向けて自分のカヌーを自分で漕げるよう、助言をお願いします。また、指導にあたっては指導者自身も「ちかい」と「おきて」を再確認し、人生の先輩としてスカウトの参考となる態度を明確化しているとよいでしょう。

4 個人の成長のための支援

4-❶ 指導者の資格と任務

教育規程にはローバースカウト隊の隊長及び副長の資格・任務について以下のように定義されています。

【隊長及び副長の資格】 教育規程 3-78

①隊長は、青年の教育を託するに足る品性と経歴を有する者で、隊指導者基礎訓練課程のボーイスカウト部門もしくはベンチャースカウト部門の訓練を修了した者、従前のウッドバッジ研修所ローバースカウト課程を修了した者、又は県連盟がこれと同等の資質と経験を有すると認めた者とする。

②副長は、青年を指導するに足る品性と経歴を有する者で、導入訓練課程の訓練を修了した者とする。

③隊長及び副長の年齢は、25歳以上とする。ただし、隊長は30歳以上が望ましい

【隊長及び副長の任務】 教育規程 3-79

①隊長は、副長の協力を得て、隊活動全般を指導する責任を有する。

②隊長は、副長の養成と指導に努めなければならない。

③副長は、隊長を補佐し、隊長より分掌を命ぜられた任務を行う。

任命を受けた隊指導者は、トレーニングおよび任務中の支援を活用しながら指導者としての任務を行います。トレーニングには定型訓練だけでなくラウンドテーブルや講習会なども含みます。また、団やコミッショナー等から任務中の支援を受けること、求めることができます。さらに、指導者が任務の要件をどの程度満たすことができているのかを定期的に評価します。この評価は、指導者も経験から学び、必要とされる能力を向上させることができるように、建設的で、透明性を備え、成人の支えになるものです。

詳細については
『スカウト運動の成人に関する方針』を
参照してください。

4-❷ 指導者の支援のポイント

ローバースカウト部門の指導者は、ローバースカウトが活動を実施することを通じて「永続的に社会に貢献できる責任ある市民」になることにつながるよう、指導・助言を実施する必要があります。

●それぞれのローバースカウトが個人の課題を認識し、個人の計画を立てることができるようにする。

スカウトが社会に貢献していくうえで、伸ばしていくべき領域について目を向け、スカウトの成長を促すストレッチした目標を立て、スカウト自身がローバースカウトとして成長と達成感を感じられるよう助言します。そのためにはスカウト一人ひとりを良く知り、能力を見極めている必要があります。また、達成度を認識できるように、具体的で評価可能な目標となるように助言することも必要です。

目標設定が挑戦的であればあるほど、実行の段階では躊躇する場面も度々発生します。挑戦するスカウトの背中を押し、目標の達成に向けて時には厳しく、時には優しく助言をしていくことが求められます。また目標の達成時には、スカウトの活動を讃え、評価することがさらなる活動へとつながっていきます。ただし、あくまでも目的はスカウトの成長であり、目標の達成はその手段であることに注意します。また、最終的にはスカウト自身がミッションを認識し、自身で活動に意味付けができるようになることを目指します。

※ストレッチした目標:背伸びして工夫することで初めて到達できるような難易度の目標。

●スカウトの視野の拡大、活動、責任感の枠を広げる。

スカウトが活動を通じて、多くの、そして多様な人々と関わりながら、主体的に活動をしていくことができるよう、活動の場や環境についての支援が求められます。ローバースカウト年代は社会経験がない、もしくは少ない場合がほとんどです。スカウトが社会との関わりをもった活動を展開する際には、社会経験を基にした助言が活動の幅を広げることにつながります。

また、活動における役割もまた重要です。例えば隊活動への奉仕で、隊指導者の指示を受けて奉仕活動を行う場合と、ローバースカウト自身が企画・計画・運営している奉仕活動の場合では大きく異なります。また、指導者に指示されて企画をしているのと、自発的に企画をしているのでも、ローバースカウト活動の目的の観点では大きく異なります。スカウトが自発的に主導的な役割を担うように助言することが重要です。

●それぞれのローバースカウトが個人の活動、チームの活動、コミュニティの活動に参画できるようにする。

スカウトの視野、活動を拡大するという観点で、スカウトがいろいろな活動に参画できるように情報を提供し、背中を押すことが求められます。活動を行うにあたって、指導者による承認は必要ですが、そのプロセスによって活動への参画が妨げられないように十分配慮します。また、ローバースカウト年代では、進学や就職を機に所属団の地域を離れる場合も多くありますが、進学先や就職先の団に重複登録して活動をすることができます。地域を離れたスカウトに対しても自隊以外での活動機会を提供するなど、様子を気にかけ継続的な助言を行うようにします。

また、ローバースカウト年代では、自身の得意や専門性がさらに確立してきます。隊指導者も、スカウトがプロジェクトを実施する際に必要とするすべての知識や技術を備えているわけではありません。そこで指導者は人間関係のコミュニティにおいて広い人脈をもち、必要なアドバイス、リソース、専門知識を見つけることができるようにします。

団とローバースカウトの関わり

このハンドブックを作成するにあたって、ローバースカウトに団との関わりについてヒアリングをすると、「ローバースカウトは指導者じゃない」「ローバースカウトをいいように使わないでほしい」という意見が多く寄せられました。一方でローバースカウトの教育の目標（教育規程7-31）には「ビーバー隊、カブ隊、ボーイ隊又はベンチャー隊の訓練指導に協力し、奉仕する。」とあります。なぜこのような状況になっているのでしょうか。ヒアリングを進めてきた結果と対応を少し紹介したいと思います。

1　目的や役割、期待値等の説明といった動機付けの不足

訓練指導への奉仕は、ローバースカウトの教育の目的を達成するための目標です。スカウトの目指したい姿について理解し、奉仕を行う中でどう成長していくのかについて伝え、スカウトの実力に合わせた役割を付与し、スカウトが自ら進んで取り組めるよう支援します。スカウト個々の経験やスキルを活かすことや、貢献の方法についても考慮します。このプロセスにより、「達成感」「充実感」「責任感」が得られるようにします。また、他の活動とのバランスも考慮します。

2 相互のコミュニケーション不足

ローバースカウトへの一方的な指示ではなく、「相互合意」のうえ、他隊の活動や団行事、地域行事等へ積極的に参画するよう助言しましょう。また、相互のコミュニケーションに努め、参画の意義や重要性を互いに理解する必要があります。積極的な参加が、将来的にスカウト活動だけでなく、地域社会において有意義な成果をもたらすことに繋がることを相互に理解しましょう。団会議や隊指導者会議等では、意見を出しやすい環境づくりを行うとともに、意見内容は軽視せず尊重しましょう。

3 ローバースカウトの取り巻く環境の理解不足

各個人の取り巻く環境（学業や家庭、仕事など）を理解し、自ら進んで取り組めるよう、職務内容について話し合い、参画できるようにしましょう。また、ローバースカウトが参画に関する情報の収集および自己啓発を通して、スカウト参画を活用した活動プログラムが実施できるように助言をしましょう。

4 指導者間の連携の不足

ローバースカウト隊の指導者は、奉仕先の他隊の指導者とローバースカウトの役割や成長について、すり合わせを実施します。また、定期的に奉仕の状況について奉仕先の指導者やローバースカウトから面談等を通じて確認し、必要に応じて再度の目標設定や動機付けを実施します。

・奉仕先指導者とローバースカウトのコミュニケーションは取れているか?
・奉仕先で取り組んでいる内容は、事前に設定した目標に沿っているか?
・ローバースカウトが自ら進んで活動に参加できているか?
・無理のないスケジュールで活動へ参加できているか?　等

5 活動環境における指導者の健全な自治の不足

ローバースカウト部門では、隊で定めた自治規則により高度な自治を実施します。成人指導者が行う団や隊の運営の方法は、これらの模範となるものである必要があります。具体的には指導者会議や団会議が、その目的を達成するものになっているかや、問題がある場合でも改善を進めようとしているかが重要です。

団・隊によるスカウトおよび青年参画の推進

- スカウトおよび青年が、活動や会議に参画をしやすい環境を作り、相互のコミュニケーションに努め、参画の意義や重要性を互いに理解し、さまざまな取り組みからスカウト個人の成長を評価しましょう。
- スカウトおよび青年の積極的な参加が、将来的にスカウト活動だけでなく、地域社会において有意義な成果をもたらすことに繋がることを相互に理解しましょう。
- 各個人の取り巻く環境（学業や家庭、仕事など）を理解し、職務内容を相互に合意したうえで、自ら進んで取り組める範囲の中で参画できるよう支援をしましょう。
- 自身の活動範囲だけでなく、「相互合意」のうえ他隊の活動や団行事、地域行事等へ積極的に参画するよう支援しましょう。
- 参画に関する情報の収集および自己啓発を行い、スカウト参画を活用した活動プログラムを実施しましょう。
- 団委員、隊指導者などに青年を「相互合意」のうえ、積極的に登用・選任しましょう。また、取り組むうえで一緒に目標を検討する等青年が、個人の成長を感じることができるよう支援をしましょう。
- 団・隊の意思決定を行う団会議や隊指導者会議等では、青年のメンバーが意見を出しやすい環境づくりを行うとともに、意見内容は軽視せず尊重しましょう。
- 県連盟（地区）・日本連盟の運営面および教育面における意思決定機関への青年の登用・選任について理解し、積極的に参画できるよう支援しましょう。
- 県連盟（地区）・日本連盟および他団体の主催で実施される青年の参画の機会・イベント等への参加を推奨し支援しましょう。

4-❸ よりよき指導者に向けて

ローバースカウト部門の指導者は、ローバースカウトの考えや能力を、純粋に尊重する必要があります。ローバースカウト自身が責任をもって活動を決定・実施できるよう、グループのすべてのメンバーと真剣に向き合い、引き立て、必要に応じた情報の提供を行います。

そのためにはローバースカウト部門の指導者は、社会人として、人生の先輩として助言を行うことが求められます。夢を失ったり楽観的になったりすることなく、経験した成功や失敗、人間関係などについての有益な助言が求められます。そのためには、指導者としてどのようなことを意識したらよいでしょうか。

●スカウトと円滑なコミュニケーションをとる

指導者は、スカウトとの間に信頼に基づいた前向きな人間関係を築く必要があります。人気取りに陥ることなく、スカウトの支えとなり、時には苦言を呈することも必要です。指導者は、スカウトに対して誠実であり、自分に知識や技術がない場合にはそれを認め、問題を解決するための新しい方法を探して、若者と協力していく姿勢を常に示すようにします。

ローバースカウトは、個々それぞれの悩みや課題を抱えているでしょう。スカウトは感情の問題、落ち込み、人間関係、社会との適応不安など難しい状況に直面することもあります。そのような場合、若者は自分に向き合ってくれる指導者を必要とします。悩みを聞く指導者は、自分の価値観を押し付けること無く、スカウトの意見や思いをすべて受け止めてあげるようにします。

●スカウトの活動を支援するための知識や技能、ネットワークを向上させる

指導者は、最近の社会の傾向を掴み、社会情勢や経済の動きなど、若者に影響を与える問題についての知識を高めるようにする必要があります。

また、ローバースカウトの取り組みの中でスカウト教育法が取り入れられるよう、スカウト個々への助言をどのように行うのかを常に考え、指導者自身も積極的に学ぶようにしましょう。また、他隊の指導者や他団体の青少年育成に携わる人、地域の協力者等とつながりをもち、意見や経験の交換を積極的に行うことで支援の幅を広げるきっかけになります。

●人生の先輩として背中を見せる

指導者は生涯を通じて、高い道徳観と倫理観をもった行動と人間性を高めるよう常に学ぶ姿勢が必要です。指導者が社会に貢献するよう日々努力している姿や、よりよい活動を目指して改善を積み重ねる姿勢をスカウトに見せ、本気でスカウト一人ひとりと向き合う姿勢がスカウトの成長につながります。

おわりに

冒頭でお伝えをした社会人基礎力は、就学前から中高年の社会人に至るまで幅広い年代を対象としています。

人生100年時代とも呼ばれ、終身雇用制度も崩壊と言われている中でキャリアモデルも時代と共に変化し、一人ひとりがキャリアと向き合い自身を高めることが求められる時代になりました。つまり、新たな人生モデルに対応するために、すべての年齢層がスパイラル状にレベルアップすべきものと考えられます。

その社会の入り口に立つローバースカウトが、奉仕活動や地域・国際への貢献活動、自己鍛錬をニーズではなく「ミッション（社会に果たすべき自らの使命）」として「ちかい」と「おきて」に基づく活動を展開します。ローバースカウトが、今まで培ったさまざまなスカウトスキルを発揮して、自らの「ミッション」を認識したうえで、取り組むことすべてが社会人基礎力を鍛える礎となります。特に次のような取り組みが、ローバースカウトの成長を促進させるでしょう。

---

①セルフエグザミネーションを通しての振り返りと自己分析
②ミッションを行ううえでの客観的な自分の評価
③ローバースカウトの取り組み状況を指導者が常に把握し、必要に応じた助言

ローバースカウトが「自己確立に向けた訓練」「スカウト運動への奉仕」「社会への奉仕」を自発的かつ積極的に実施するために、指導者の助言は不可欠と言えます。また、日本連盟からのさまざまな情報提供や専門的サポートの提供、訓練や事業への参加が、より活動を活性化させることに繋がります。ローバースカウトが地域社会で活躍すれば、スカウト運動が広がることにつながります。

ベーデン-パウエルの「ラストメッセージ」に「幸福を得るほんとうの道は、ほかの人に幸福を分け与えることにある」と書かれているように、ローバースカウトが自らのミッションを通して他人に幸せを分け与えることができるよう、指導者はスカウト一人ひとりと向き合い、助言を行っていただきたいと思います。

多くのローバースカウトの活動が世間に認められ、スカウト運動が社会においてなくてはならない存在となり、更に発展することを願っています。

MEMO

ローバースカウト隊リーダーハンドブック

令和7年2月　初版発行

発行　公益財団法人
ボーイスカウト日本連盟

〒167-0022
東京都杉並区下井草4-4-3
電　話：03-6913-6262（代表）
U R L：https://www.scout.or.jp